



# 障害のある人のスポーツへの多様な参加を支援するために

## 障害のある人のスポーツ参加支援推進委員会

本委員会では会員に障害者スポーツについて知る・学ぶ・取り組む機会や情報を提供するため、会員・士会の実践事例を中心に積極的な情報収集を行っている。2021年2月号では会員2名の活動エピソードを紹介した。本誌では、士会、障害者スポーツ競技団体、スイミングクラブ等と連携して障害がある方のスポーツ参加を支援している宮城県作業療法士会の佐藤好氏に、ご自身が障害者スポーツにかかわることとなったきっかけや現在の活動内容についてご報告いただく。

### 第12回 パラ水泳を通じて垣根を越えた支援

国立病院機構宮城病院 佐藤 好

#### 障害者スポーツに関わることとなった経緯

作業療法士になる以前から、スポーツクラブで水泳インストラクターとして水泳指導に携わっていた。幼児から社会人、主婦など、年齢や運動経験にかかわらず、目標に向かって水泳に取り組み一緒に目標を達成することに喜びとやりがいを感じていた。パラ水泳と出会ったのは、2015年に作業療法士として現在の病院に入職後、東北身体障がい者選手権水泳競技大会にクラス分け\*委員として参加したことがきっかけであった。県内外の作業療法士・理学療法士との交流はとても新鮮で、会場で障害のある方の動作や周囲の人との関わり方を目の当たりにする場合は、病院に入院中の患者さんと接するうえでも貴重な機会となった。

\* 同じ障害がある選手でも障害の程度は人によって異なるため、それらが競技の勝敗に与える影響を最小限に抑える必要がある。公平に競えるように同程度の障害のある選手同士で参加クラスを分けることを「クラス分け」という。

#### 現在の活動

クラス分け委員として大会前の選手のクラス分け、クラス分け委員の養成と普及活動、宮城県内の

パラ水泳チームでの指導や大会出場のサポート、選手発掘事業などに携わっている。練習会ではこれまでは障害者用の公共プールのみを利用していたが、2021年からは仙台スイミングスクールに会場を移し取り組んでいる。民間のプールを会場とするにあたり、動線や更衣室などの設備については作業療法士としての視点で確認が求められる場面もある。

また、2021年度より東北身体障がい者水泳連盟、宮城県障害者スポーツ協会、宮城県スイミングクラブ協議会、宮城県作業療法士会、宮城県理学療法士会、パラ水泳チーム MOTTO 合同で「身体に障害のある方のためのプール体験教室」を企画している。第1回目は残念ながら COVID-19 感染拡大に伴う緊急事態宣言により延期となったが、今後の開催を予定している。水泳コーチは障害のある方と触れ合う機会が少ない一方、作業療法士はスポーツに携わる経験が少ない。この両者の不安要素を補いつつ、それぞれの強みを生かして、障害のある方が自宅から一歩出て参加する活動をより安心して体験してもらうために、プールを通して作業療法士・理学療法士と水泳コーチが協同でサポートする試みである。



水泳の練習風景



クラス分け勉強会

### 現在の課題

障害や年齢にかかわらず、身体や心を動かす機会  
は大切だが、実際には当事者一人でその機会を見つ  
けることは難しく、スポーツを始める前に諦めてし  
まうことも多い。障害がある方と関わるなかで、い  
かにスポーツを含む新たなことにチャレンジする機  
会が少なく、学校体育の授業では見学を強いられる  
などの制約を受けているかを実感した。日常生活を  
越えて自由にスポーツに取り組める環境や機会は地  
域によってはまだまだ少ない。また、水泳を含む多  
くの障害者スポーツ競技団体が若手選手の確保に尽  
力しているが、競技の専門性でいえば障害者スポ  
ーツ特有のクラス分け、障害の種類や程度、残存能力  
等を判断しながら初心者スポーツへと導入するサ  
ポートができる人材が不足していると感じる。

### 今後障害者スポーツへ関わってみたいと思う作業療 法士の方々へ

職場を越えて、多くの作業療法士・理学療法士ス

ポーツ指導員と交流しながら行う活動は、大変有意  
義な時間であり、得るものも大きい。作業療法士は、  
対象者の「生活」へアプローチすることが大きな役  
割だが、スポーツは趣味・生きがい・仕事・交流の  
場となりえる生活の一部であり、競技の専門的な知  
識だけではなく、移動や更衣、コミュニケーション  
やルールの理解など、競技に行き着くまでの過程へ  
のアプローチは、作業療法士が得意とする分野では  
ないだろうか。より多くの作業療法士がアプローチ  
として日常生活動作（ADL）、手段的日常生活動作  
（IADL）に加え、スポーツやスポーツへの動機づ  
けも介入時の一つの選択肢に入れてもらうことで、  
対象者の活動の幅が広がるとともに、活動のなかで  
作業療法士としての役割や可能性を再認識するこ  
とができると感じている。